
アシスト

マジック・ジョー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アシスト

【Zコード】

N1006A

【作者名】

マジック・ジョー

【あらすじ】

世間からちやほやされていた『天才』と、影に埋もれながら努力してきた『天才』とのバスケ1ON1がはじまりそして同じ学校に入った。

第一話『天才』の不満

俺の名前は沖田譲二^{おきたじょうじ}。小学6年。俺は周囲から『天才』だとか言われてちやほや

されていた。その『天才』というのはバスケがらみである。親父の強制で、1歳からすでにバスケットボールに触っているのだ。そして毎日10N1を親父とやつてきた。そして小学4年にミニバスケットボールクラブに入りいきなりレギュラーをコテンパンにしてスタメンに入った。

そして5年までは県大会どまり、だが小6のとき全国大会に行き、月間バスケットと言う雑誌に、『100年に1人の天才。チーム72得点中42得点15アシスト』と書かれ、『天才』といわれるようになつた。つまりチーム得点すべてにかかわったってことだ。だけど、いきなり転校することになつた。でも嬉しかつた。なぜつて?弱いチームから抜けられるからつてのもあるけど俺は欲求不満だつたから。その不満は、自分で得点して勝つてたけど本当は、アシストをやりたいからなんだ。アシストつてのはバスをして受け手がショートして入つたらアシストになる。なぜやりたいのかは、マジック・ジョンソンと言つNBAのものすごいアシストをした選手でその人に憧れてるから、だからその不満を解消してくれる受け手がいるかもしれないから。

引越しの車の中から、親父が「ここがお前が行く中学だぞ。」その中学は新しく名前は風ヶ丘^{かぜがおか}中学引越し先の小学校はもう春休みに入つていて、友達も何もなく中学に行く。

「さあついたぞ!ここが今日から住む家だ!」外見は普通だが、1つ違うのは庭にオールコートの庭があることだつた。俺は早速シユ

ートを打ち始めた。今までは親父とやつてていたが、もう相手にならなくなつたので最近は自主トレにしている。

しばらくすると、近くに住んでいると思つやつが話し掛けてきた。

「おー引っ越してきた人だな？俺もバスケやつてるんだ 結構うまいなー？でもシユートフォームの手首にクセがあるな？直した方がいいぞ」いきなり話し掛けただめだしか？ふざけんなと思ったけど疲れていたので家に戻つた。

「おいおい！シカトか？人がせつかくアドバイスしてやつてんのに」がシャー！やつが言い終わると同じにドアを閉めた。シャー「おいおい。カーテンまで閉めるか？普通「俺はムシヨーにイラついた【確かに俺はクセがあるよ！でも何でてめーに言われなくちゃいけねーんだよ！全国にもいなかつたやつに！下手なんだろ！ふざけんな！】イラつきながらもベットにはいった。

翌日

「おー！譲ー」「なんだよ親父！」「…なにいきなりキレてんだよ？まあいいや俺じや相手になんねーからな。ここ、いつてみろよ」B-Lの最近引退した選手いるつて、バスケ教わつてきらっ。」そういつて渡されたのは地図らしい。でも確かそれだつたら近くの神社だつたよな？いつてみるか。

その後昨日のやつをコテンパンにしてやる。だが近くの神社だからつて甘く見た。考えれば昨日初めて来た場所だ。やっぱ地図見よう。もつてきてよかつた。ちょっと親父に感謝と思ったが、すぐに憎しみに変わつた。渡された地図は世界地図だつた！細かいのをよこせ！そう思つた。

「ほん！」「やあ！」突然肩をたたいて話し掛けてきたのは昨日のやつだつた。「覚えてる？」「ああ、覚えてるさーいきなりダメだしして來たムカツク奴だつてなーどうせたいしてうまくないんだろ？」と言いドンと押した。だが押した手は相手の体にくついたままだつた。「おいおい！暴力反対！」俺はまた屈辱を受けた。自分は力

がある方ではないが、ない方でもないからだ。『神社を探してゐるだろ？案内してやるよ。』「あ？何で知つてんだよ！」「ふつ！だつてさつき一人で大声だしていつてたジヤン」確かにそうかもしれない。せも、こいつに道を案内されるなんてしゃくだからな。「おいおいだんまりかよ？だつたらおいてくぜ？」！！！！！「いやそれは困る案内してくれ」「いいけど、人に物を頼むときには、礼儀つて物が必要だろ？」「……お願いします」「つはははつは。よろしーつて言つてもこれからおれがいく場所と同じなんだけね。」

「あんた、沖田譲」つて言うんだろ？」「！何で知つてるんだ？」

「県大会であたつた風神^{かぜかみ}つて覚えてるか？」「ああ、62対22で勝つた所だ」「そこにいたんだ。つても怪我で出てなかつたけどね。いいか？俺がいたら風神は3倍点数が上がるんだよ！だから俺が怪我じやなかつたら勝つっていたんだ。そして今の俺とオメーは逆の状態だつたんだよ。」「ふん！それはないね。たら、れば、の話なんて聞きたくねーよ」「着いたここだぜ」そこの神社の長い階段を上がると古びた神社としつかり整備されてるストリートバスケのコートがあつた。

ガランガラン「おーい。おつちゃんいるかー？」奴が神社の鈴を鳴らし誰かを呼んでいるようだ。奴？そういうえば名前聞いてなかつたな。

古びた神社の中から30から40ぐらいのおつさんが出てきた。バキ！「こらー尚樹^{なおき}神社の鈴で呼ぶな！それに俺は42歳だおつちゃんじやない！死んだお前の親父の三上さんはいい人だつたんだぞ！」

「おいおい。俺はダメな奴つてことか？それは」「ふん！ここで誰だ？あいつは」

「あー昨日引つ越してきた沖田譲」つてやつだ。『話に入れねーなーでもあいつ。三上尚樹つて言つ名前なのか。』「おい！そこの譲二！尚樹と10N1やつてみろ」！【別にイーけどいきなり呼び捨てしてしかも命令かよ】「まーいいぜ」こうして何か無理やりなとこもあるけど三上尚樹と俺の10N1が始まった。

・仲間として

【三上尚樹、昨日俺にダメだししゃがつたからな、実力見してもら
うぜ】と譲二の考え方。

【沖田譲二、俺はお前より強い、俺は努力してきたんだ！誰よりも
と尚樹の考え方。

「はじめるぜ？沖田」「かかつて来い。三上」【ふふ、世間からも
『天才』と言われ、脚光を浴びてきた譲二と、陰にいながらもその
実力は譲二並の『天才』だろうと思う尚樹。譲二の試合は全国で見
たことがあった。尚樹は普段から。いい試合が見れそうだ。】「先
攻、後攻は？」「おっちゃん、ジャンプボール上げてー！いいよな
？」「ああ」尚樹がおっさんにボールを渡す。「いくぞ？半分から
少しでも出て飛ばした方の勝ちだぞ。」「OK ×²」二人の声が合
わさった。「そりや」ボールが高々と上がる。一人同時にジャンプ
をする。バシイ！！ほとんど互角だった。だが、ボールは俺の後ろ
にいった。「俺の勝ちだな」先攻は尚樹に決まった。尚樹がボール
を持つ。俺も腰を低くしディフェンスの構えをする。クツ・【シユ
ートか？いや、フェイクだ】ダフダン尚樹が右にドリブルを開始。
ギュ。「え？」たつた一步で尚樹はレイアップショートに行く（一
番使われやすいゴール下の近くでランで行った時いくショートのこ
と）尚樹がショートに行ってジャンプすると同じに俺もジャンプし
て、ショートブロックに行く。ボール、手に届く、「行ける！！」
ボールに触れかけた瞬間ボールが落ちる。尚樹はクラッチを入れた
のだ。（ボールを上まであげ戻してまたショートに行くテクニック）
スペ完璧だった。「おいおい、行ける？なにが？」カ一俺はむかっ
として、自分のオフェンスで、取り返そうとして、同じショートを
したが、バシフィ「余裕だぜ！？」沖田譲二！」「なんだと？」う
ん。尚樹のほうがすこし上のようなだが？譲二が手加減しているよ

うにも見える】 2 - 0、2 - 1、2 - 2、4 - 2、6 - 2、「おいおこどりした！沖田？」6 - 2だぜえええ？さつきの勢いはどうした？」「おい、三上。そんなにチヨーしに乗つて後で後悔すんなよ？」今からマジになつてやるから。【沖田。今のははつたりか？はつたりじやなきや嬉しいぜ。】の三上尚樹が知つてゐるあんたは、そんなんによわくないからね】 ダン、譲一はボールをもらい直ぐにドリブルを開始。ダンダッ「よしコイ！沖田あ——」右か？左か？きゅつきゅつきゅつきゅつきゅ。譲一はサイドステップをしながら体を左右にふる。「な！」【簡単に抜かれた！！？やばい。】譲一はジャンプショートに行つた。「おいおい！お前のショート一ヤあクセがあんのわされた？簡単にブロックできるぜ？！」……クセがない！スパ「ふん！簡単だね】【こいつーさつきのは本当にはつたりじやなかつたのか？】「てめー、昨日のクセは？」「ふん！てめーに言われる前から直してたんだ。で、今日で直しきつた」「次、おめーのオフェンスだぜ」尚樹はむきになつてやり返そうとするが、簡単にステイールされた。【…まじかよ？】その後も、点差が縮まつていく。「くそオー」「6 - 6。」ザッガショ「7 - 6」スパ「8 - 6。どうした？そんなもんかよ？」【くそ！俺じやねーみてだ強えーこいつは！だけどよ、このままじやいけねエーよ。】尚樹がボールを持つと直ぐにダッシュショットホールを狙つた。【ふん！三上！確かに前はうまい！だからこれで終わりだ。ブロックしてやる。】【ダメかブロックされる。！おいおい俺はあきらめーんだよ！…ぐーん「な！なんだこのジャンプは？」ザシユツ【すげ ジャンプだ。】といつなら、俺のアシストに答えられるかも】「はあはあ8 - 7だ……せ」「やこまでえー……」「あ、？何這つてんだおつちゃん

?まだ終わつてねーよ?」「いい……」の続きは中学で進化してから魅してくれ!」「は？ふざけんなよ?俺は三上をぶつたおすんだよ!」「はつははつは！戦い競つのもーいが、競つて強くなり、仲間として相手をぶつたおすのもーいと思わねか?「そこでだ!

お前らミニバスを卒業してるが、最後の引退試合として申し込んだ
いた。相手は、譲二。お前が全国で敗けた。小佐久ミニバスケット
チームだ！」「はあ？意味不明なこといつてんなよ！」尚樹が反論
した。「そうか？お前のシュートと、俺のアシスト。楽しいと思う
けどな？」こうして、引退試合が行われることになった。

「おっせんー」「馬鹿たれーおっせんじやない！俺は津堂^{つね}_{主^け}だ！」
と「じ」と一発殴られた。「つーか、今初めて知ったんだよ。」と
つぶやくとまた一発バキイと殴られる。「じゃあ、津堂さん。何で
呼んだんだ？」「譲一が尋ねると「おうーお前のコニフオームだ！」
受け取つたのは結構新しいと言うより新品の7番のコニフオームだ
った。「本当にやるのか？」「ああ、明後日だからな、もうじき尚
樹がくるから、案内してもらつて、ミニバスチームと馴れとくんだ
ぞ。」階段を駆け上る音が聞こえる。「尚樹がきたんじやねーか？
だが、駆け上がってきたのは尚樹じゃなかつた。

「はあはあ。お前が三上尚樹か？」そいつは譲一に指差して聞く。
「いや、俺は違う」「な？じゃあ誰だつてイ・・・どん。そいつが
言い終わる前に尚樹がきて押して倒れる。「おいおい。じゃまだぜ
？そー」」「いきなり何すんだつてざけんなよー」「んだよ？そん
なとこにこるお前が悪いんだろう？」「まあまあひまわりと待て。」「喧
嘩寸前の二人を津堂さんがおさえる。「どこので君は誰だ？」「俺
か？俺は小佐久のエース。宇野誠也^の_{せい}^やだ！今度の試合の風神のエース
三上尚樹！シヨーぶー！」と叫ぶ。「変な奴！俺は勝負なんてしね
よ！ばーか」がん。誠也はちょっとシヨックだつたらしい。「
だつたら覚えとけ！お前にマークしてぼーぼーにしてやる。」と叫
ぶとまた駆け下りていった。「あわただしい奴だな」と津堂さんが
言った。「おい沖田！」「あ？」「あんな奴いたのか？」「ああ、
いたよでもエースは違う奴だ。でも、小学生のシユート力じやねー
ようなものすげーシューターだつたよ。」「ふーん。まあいいや、
沖田いくぞーミニバスチーム。」と行く事になつて体育館につく。
尚樹が、「これがチームだ。」そこにいたのはわずか3人だった。
「なんだ？これは？」「つーんとね、5年3人と俺達。みんなやめ
ちゃつたのねだから風神自体。引退みたいな？」「いやみたいな？じ

やね よと思つた議二だが仕方ないらしく。尚樹が一人一人紹介する。「こいつは、でけーだろ? うちのセンターだつたんだ。」「こんちは。西間健一です。」「こいつらはうちのガードの二人。双子なんだ。」「おうよ!俺は鹿島竜也!」「同じく。勝也。」「よろしく」
「×2」「まあこの5人だ!」と尚樹が言つ。「じゃあ、フォーメーションの確認するか?」「尚樹が言つてつて決まったのが、PG鹿島竜也。SG鹿島勝也。SF沖田譲一。PF三上尚樹。C西間健一。これに決まるには少し波乱があつた。それは、「おい三上! 何で俺がSFなんだよ! PGだろうが!」「おいおい。この双子の事考えろよ。一人とも150ダゼ? Fは無理だろ?」「ふん! 俺は納得しねーぞ。」と言い合いになつてゐるときに、津堂さんが「まあいいじゃねーか。それにお前がPGになつてもアシストしきれるのは尚樹だけだ。だつたら得点できるSFで尚樹のアシストした方が魅力的だと思うけどな?」といつたので仕方なく了解した。そして、試合の日が來た!

俺が決める。

ジャンプボール。「尚樹が飛べ」という監督の指示。まあ監督と言つても、津堂さんだけど。

ピイイ 「両チーム整列してください。」「いいか?三上。あの4番がエースと言えるポストプレイのうまい奴だからな、きをつけろ。シユーターには俺がつく」「了解」ピー。ジャンプボール。ボールが宙に舞う。バシイ尚樹が勝つた。「あー!」運悪く相手がボールを保持。「宇野!..」ボールを持った5番が6番の宇野にパスを出す。バしい「なにいー7番!何でお前なんだ!三上じやねのか?」なんて言いながらシユートを打たれた。「ふん!はいんねよ!」だが、宇野のきれいなシユートフォームから放たれたボールはリングに吸い込まれるかのように入った。シユパ「きれ-なフオームだなー」と何故か感心する津堂。Gの双子がボール運ぼうとする。「え?」「な?」双子の兄弟は驚いた。「いきなり、オールコートマンツーだと?」「体力に自信があるのか?」と観客がわめく。だがさすがに双子。うまいコンビネーションでボールを運ぶ「勝!」シユ・パン「竜!」シユ・パンこのあたりは見事だ。その間に誠也が話し掛けてきた。「おい。余所見すんなよ?三上にはつけないがお前にプレイはさせないぜ?」「ふん!やつてみる。」と言い返す。「へい!バス」バシイ譲二にバスがとうる。その瞬間フツ「あつさり抜かれた!」だが4番が俺の前に直ぐにカバーに入る。が、スープシイ。見事なバスだつた。尚樹にとうりザシユツ簡単に決めたのだ。この二つのプレイが2チームともに火がついた。県大会と全国。その差がなくなつたように試合が進む。前半残り1分。勝也から譲二にバスが渡り尚樹へのアシストがまた決まる。そこで誠也が気付いた【今のバスだし】もういちど、譲二 尚樹のアシストが決まる。【やっぱし。】誠也は確信した。ハーフタイム。「よツシャーこのまま勝てるぜ」と尚樹が叫ぶ。「それはどうかな?」譲二がつぶや

く。

小佐久の監督「おいー!どうした? 全国にいつたチームだろ? あんなチーム42・43なんて!」誠也の口が開く「いや、7番と4番の沖田譲一と三上尚樹。あの一人は全国レベルです」「じゃあ、どーすんだ?」「大丈夫。あの二人の個人プレイはすごいが、あんまり経験がない。タイミングが同じだ。そこを狙つてカットするんだ。後は俺が決める。」ドン! と言い張る。ピー後半開始!

アシストなしで行いつ

後半開始。「なあ沖田？ さあやどうかな？」とか言つてたけどなんかあるんか？」「ああ、すぐにわかるわ。どうしようもないキャリアの壁。たぶんそこを狙つてくるよ。」「はあ？ 意味わかんね…よ。」ピィィー 最初にボールを保持したのは譲二。「もうやられないよ！ あんたがどんなに上手くても。俺が止めやる！！」きつぱり言い張る宇野。「ふん！ 俺を止められんのは三上だけだぜ。」バツダンダン。「チックソ」今度はあつさり抜かれずに喰らいつく宇野。いや、喰らいつくどころが追い詰めていく。「譲二君！」竜也が追い詰められてるのを見てボールをもら以に来た。「ふーナイス！」と言つて落ち着いたフェイクをかけ一気に抜くダン「あ！ しまつた」宇野が叫ぶが、やはり4番がカバーに来た。だが譲二はショートをうとうとする。が、「！ なッ」「もつやられねー！」宇野がシユートブロックに来た。【さつき抜いたのに、なんて瞬発力だ】だが譲二はその瞬間。尚樹にバス、が、ステイールされた。「しまつた。」ステイールした4番はすかさづ「誠也ああ！」シユ…バン。キュ宇野がシユートについた。シユパツ。「おっシャあー！」宇野が叫んだ。ショートはこの試合一番いい弧を描いてはいった。「くそ！ やられたな！ 沖田のバスはよかつただけど」尚樹が言うが俺は「いや、完璧で良すぎたんだ。」「はあ？ よかつたらカットなんてされねーだろ？」だが、このまま波に乗った小佐久は宇野を中心には得点を重ねる。気が付けば46-56の十点差で負けていた。ピー「タイムアウト！ 風神！」意氣消沈してベンチに戻る。「だーくそバス完璧に見破ってるよ。」尚樹が叫ぶが、津堂さんが、「うーんこればっかりは仕方ないからなー。こうなつたら、アシストなしで行こう！」「え？ んでもアシストがないと。」と譲二が言つが、「いやだから、ポジションどおりのセオリーで行くんだ。竜也と勝也がリードして皆で得点しよう！」「ビー」「タイムアウトが終わったの

で選手は「一トヘ！」「納得はいかなかつたけど、津堂さんの言うと
うりにするしかなかつた。」「おい！十点差だぜどうすんだよ？」「宇
野が譲二にいやみを言つが、譲二はシカトをしていた。いや集中仕
切つていた。「はい！」この試合で初めて、健二、勝也、竜也がオ
フェンスにかかる。「ハイポスト入つたーチェック！」「行け -
健二！」「だんondon！健二は5年と思えないパワー・プレイであいてを
吹つ飛ばすクルツ。シユ。バス！」「おっシャーナイス！」が、すぐ
に宇野が3Pを打つてくるガンツ「はずしたありバウンド」ゴール
下でリバウンドの取り合い！バしい！勢いをよくとつたのは尚樹。
「おし！速攻！沖田あー」「ぶんつぶオーバシイイイイ」「いつてー
なんちゅーベースボールバスなんだ！」「おい！もう抜かれねーよ
！」宇野が前に立ちはばかり。「ふん！1つ忘れてんぜ？」「な？」
譲二は3Pを打つ。決して宇野のように上手くはないが決まった。
ガソッガソ、すぽ。「おし。5点差！」残り1分。小佐久の7番が
シユートを放つ。が外れる！パン健二がリバンを取つた。「勝也君
！」シユツパン「竜！」ぱし一人で運びシユートを決める。【相手
の5番のボール出しの相手の8割は、4番！】譲二はバスを呼んで
カット。「沖田！」尚樹が来た俺もバスをする。バシイ！なんと尚
樹も3Pを打つ。シユツ！バシユツ決まつたー「同点だーーー！」だ
が宇野がすぐに勝負を仕掛けるが、宇野が初のミス。ルーズボール
を勝也が取る。無我夢中でバスを出して俺がボールを持つた。ジャ
ンプシユート。スペツ。「よツシャー。」残り5秒。譲二達は勝つ
たと思い浮かれた瞬間。4番がバスをだし宇野に渡る。「逆転には
これしかねえ」3Pを放つ「しまつた」きれ - な弧を書いていた。

「しまった！」宇野のショートはきれいな弧を描く。スー・ガントがんがんぐるぐる。ボールはリングの上で回っていた。ボールが止まるスー・だんつだんだんだだ。ピイイー「試合終了！両チーム整列。」両チーム整列する。審判が「58・56で風神の勝ち！礼！」

「ありがとうございました！」

宇野シユートは外れた。悔しそうにする宇野を見て津堂さんが「悔しがっているが、奴のシユートは12本中10本といつすじい確立なんだけどな。」確かにそうだった。俺は見事に奴のシユートを止められなかつた。「おい！三上と沖田！試合には負けたが勝負には負けてねえぞ」と宇野が叫ぶ「で？負けてね・からなんだよ？」と三上が嫌らしく言つ。「ぐつ！言つつもりはなかつたんだが、今度引つ越してな、風ヶ丘に行くことになったのだ！だからそこで勝負だ」驚いたがすぐにダッシュで帰つた。「ふーん。あいつも同じ学校かあー」と尚樹が言つ。「ふん！だつたらおもしれーチームになるじゃねーか。」この譲二の言葉に津堂は思った【とつさの譲二】が言つた言葉だつたが、本当にそつなつたら面白いどころじゃないかもな】「よし。今日は俺のおごりだなんか食いに行こう!」「やつたーさすが津堂さん!」「よし！ここにしよう！」ついたのは焼肉7人以下で20人前食つたら無料の場所だつた。「なんでここ？」と譲二が尋ねると「尚樹がな」と一言津堂さんが返す。その後尚樹が1人で10人前食べた。なんでも前に津堂さんがおひつたときに破産したらしい。そして譲二達は。

入学式

「はあああ式つて本当にやだね・長いし」と尚樹が言へ。「ふん！だから冷静さに欠けるんだばーか

譲一と尚樹そして誠也の三人は見事に同じクラスだった。だが事件がおきた。事件と言うより譲一、尚樹、誠也のボケだった。なんとバスケ部が存在しなかった。「おいおい。バスケ部が存在しねーなんて聞いてねーよ」と尚樹が言つが誠也が「いやいや、お前知ってるよ！一番この中学に詳しいんだから」「あ？しらね・よボケ！」「なんだとー」ドカドカバコバキ【そいついえばこいつら、よく喧嘩すんなー？でもバスケ部がねーとわな・そう思わなかつたし】と譲一が考えながらふらふらと何処かに行つた。「ん？譲一イネ・よ」喧嘩をしていた尚樹が気付く。「てめーのせいだろうが！」宇野が言つてまた喧嘩をしだした。ところで譲一が行つたのは校長室。

私が作りましたか？

「んこん！」譲一はノックをして校長室へ、「失礼します。1年3組の沖田譲一と申します。校長先生に用があつてきました。」そこにはザビエルのようにはげた校長先生がいた。「ん？何だね入学早々。」譲一はスタスタと校長先生の前へ「先生！バスケ部を作つてくれさい！」「なつ...」「ほつ」「ほ」と驚き咳き込む校長先生。「ごめんねーよく聞こえなかつたよ。もう一度言つてくれないか？」「いや、だからバスケ部を作つてください。」きつぱり言つ譲一。だがこの校長先生ある事件が理由でバスケ部を作らないらしい。「いや、だめだ、だめだ！バスケ部は作らん！」理由はわからないがいきなり怒鳴ってきたので、譲一は怒鳴り返して反論した。「なんでだ！女子はあるじゃないか！ふざけんな！」「む、なに？」譲一はつい勢い余つて言つてしまつた。だが、その後も反論をするがまったく了解する事はなく譲一はあきらめて出て行つた。その後尚樹と誠也にそのことを話した。「なんだそれ！おかしーだろ！」誠也が怒鳴る。「ンなこと言つたてしょーがねーだろ？校長があほなんだし」と尚樹も言つ「まあ仕方ねーだろ。でもどーする？この2時間の部活見学。」譲一がつぶやく。すると誠也が「女子はあんだろ？見に行つて見よーぜ。」体育館に行つてボーッとする三人。「バスケット。好きなんですか？」背後から声がする。後ろには三人の女子が立てていた。「あつ！いや、だつてずっと見てたもんだから。」少し恥ずかしながら真中の子が言つ。「おうー好きだぜ！でもよー男子のほうがねーんだよーひどいとおもわねー？」と誠也が言つ。すると右端の子が真中の子のところを指差して「うーん。あのさーこの子藤崎麗華ふじさきれいかつて言つんだけどさー」言い終わる前に誠也が口を出す「わかつた！さては俺のファンだなー俺も結構全国で活躍したからなー」と偉そうに言うが「違うよー」さつきの子がすぐに言つ「なーえーと。Aさんーうそはいけないー」でまた先の子が「私は

鈴木藍^{すずき あい}そしてそつちは、永野亞由美^{ながの あゆみ}だよ。だれがAさんだそれに嘘^{うそ}じゃないし。」「そうか！じゃこつちは」と誠也^{まことや}が自己紹介をしようとするが。鈴木^{すずき}が「知ってるからいいよ。あたしらで一試合見てたの。風神対小佐久のやつ。それで話がそれちゃったけど。麗華^{れいわ}がねー沖田君のファンなんだって」「ちょっと藍ちゃん！いきなりそんなん。」あせっていた。だが鈴木は「まあいいジャン！うん麗華ねー、あのチーム得点すべてに関わった試合あれ見てからなんだ！」とハイテンションに話しているが、譲二^{こうじ}は「ふーん。あつそ！俺今バスケ部作ることしか考えてないから。」と冷静にあつさり返す。だが藤崎^{とうさき}が「だったら。私が作りますよ！」と叫ぶ。「はあ？どうやって？」と尚樹^{まさき}が言つ。するといきなり永野^{ながの}が「あーそつか。麗華の親PTAの会長だもんねー」「え？」今この言葉で三人に希望の光が注ぐ。

条件発生！

譲一達3人は、藤崎麗華にバスケ部を作ってくれるなら作ってくれ、とお願いした。

そして、藤崎は彼女の親に言い、彼女の親は快く引き受けてくれた。

「こんこん。」「失礼します」と藤崎の親は校長室の中へと入っていく。
「おお、これはこれはP.T.A会長藤崎様。今日は何用でいらっしゃったのですか？」

「はい、今日は男子バスケットボール部を作ってくださいように依頼にきました」

「ごほつごほ。校長先生はまたも咳き込む。だが落ち着いて話す。

「それはなぜですか？」

校長先生が聞くと藤崎の親はこう答えた。

「いや、数ある部活動の中で男子バスケットボール部を作らないのはおかしいと前々から思っていたんですが、先日娘が作って欲しい生徒さんがいるといいましてね。それがきっかけできました」

だが校長も反論する。

「いやですが、わが校はある事件をきっかけに男子バスケットボール部を廃部したんですよ」

「はて？ある事件と申しますと？」

校長先生の言葉に疑問をもち聞くと。

「まあ、言つのもお恥ずかしい事件があつたんですよ」

だが、ここまで来ると藤崎の親も反論の材料がなく仕方なく話を切り出した。

「ならば、何かの条件をクリアすれば、作って頂けるのですか？」

そこで校長の出して条件は。

「ならば、今年、6月の県大会の優勝チームと戦つて、勝てたらいいですよ。」

と言つ条件だそうだ。だが藤崎の親も。

「そんなの無理に決まってるじゃないですか！それに県大会の優勝チームが相手してくれるはずないでしょ？」「

と反論はするが、校長もそれ以上無理だと言つ。して口論が終わり最終的にこうなった。

△条件。県大会が終わり、先に進めなかつたベスト4の相手をし勝てたら部を作る。ただし、負けてしまつたら、男子、女子、それぞれのバスケットボール部を完全に無くす。』

「そうなつてしまつた、もう引き返せない。すまないな、なおベスト4の相手は校長じきじきにお願してくれるそうだ」

この言葉を聞いた譲一たち、そして女子バスケットボール部は愕然とした。だが、たつた1人誠也が言つた。

「ははっはは。俺は全国にいつたんだぜ？そして沖田も、三上も全国レベル！県大会。しかもベスト4なんてよゆーだぜ！ははっははははははは」

ふざけていいるようだつたが、一本気らしいそして尚樹も叫ぶ。

「そーだよなー負けるはづがねー勝てるぜ！」

だが譲一は一人違つた。

「ばーか。人数たんねーだろ？せめて後一人。それに中学では時間も伸びるから交代が必要だろ。」

「つて何で冷める事をいーうかね？だからもてねーんだよ。冷徹人間！」

と誠也に言われる。だがそこで女バスのキャプテンが、

「大丈夫。女バスもコート貸すし人集めも手伝うから！」

と言つてくれて少し嬉しかつた。

そして俺達の挑戦は始まつた

男として逃げらるね よ

「あーあ、ビラ配つなんてやつたらんね・よ
誠也が愚痴をこぼす。

「つるわいわね・まじめにやりなれこよ・あつ・お願いしマース
誠也と永野亜由美はビラ配り。

「ふん！ あんた最初は普通のおとなしさだと想つてたのに、つる
せーやつだつた。」

そう、誠也が言つと永野は少し顔を赤くして

「大きなお世話よ・あんたわかつてんの？ 女バスの存続もかかつて
るの・まじめにやんないと負けちゃうよ・」

「つるせーょ。俺がいればかてるつ・の・それにあんた怒んね
一方がいいぜ？ 笑つてる方がかわいいから。」

さりげなく普通にさつらという誠也だがこんなのは日常茶飯事。ま
あ確かに永野は藤崎に並んでかわいい、ショートカットで、どんぐ
り眼、それはどこかの恋愛ゲームに出てきそうなロリキヤラであ
る、でもさすがに永野は赤くなる。

「あ、あんたじやないわよ！ 永野亜由美って名前があるんだから・」

「ふーん。わかりましたー亜由美ちやーーーん！ てね」

その瞬間、誠也の顔に音速をも越える鉄拳が飛んできた。
その鉄拳は誠也の顔にあたつた時に、おそろしい轟音をたてる。

「ぐうあああ

たまらず誠也も吹つ飛び。

「あたし、空手2段なんだからねーこれ以上ふざけたらむつとやら
からね」

そういうが、もつすでに誠也は鼻血が出ていた。

そしていつは尚樹と鈴木藍。

「一人はずつと沈黙したままだ。

この二人は一番字が上手なのでビラを書いている。カリカリとシャープペンの芯が紙にこする音しかしない。カリカリカリカリカリカリカリカリカリそのうちに尚樹が吹っ切れる。

「ああああ！カリカリカリカリって何なんだ畜生ー！」

「つるさいよ！しつかりやりなさいよー！」

叫ぶ尚樹に鈴木の喝が飛ぶ。

「つておい！あんたおかしくならないのか？こんなに同じ物を書いて！せめて話ぐらい、しようぜ」

「やだ！あんたと話すのストレスたまりそうだし、私こうこうの慣れてるし。」

そういうえばかりの達筆、たぶんいつもこの役なんだろう。少し、哀れみを感じるな。

「ねえー沖田君？いいの？さぼったりして、あたし達って勧誘だよね？」

譲二と藤崎は一人で勧誘に行くことになつている。

「いやさばりじやあ、ねーし作戦会議だ。」

そう言い沖田がやつてるのは石で何かやつている。

耳を澄ますと何かぶつぶつ言つてゐる、かなりあやしい。

「ヒューあついのかいおー一人さん？」

このする方を向くと柄の悪そうな三人。

「ねえ沖田君？どうしよー。あれ？武富くん？たけみや 武富聰さとくんだよね！」

？」

どうやら藤崎は真中の奴は知つてゐらしい。

「知つてゐのか？あいつの事」

「え？知つてゐも何も同じクラスじゃない」

「ふーん。同じクラスか？武富君！バスケットをやらないか？」

「あ、？なめてんじゃねーよー！」

そう言い拳を振りかぶり譲一のほほへと一直線にこゝを直撃する弾けるような音をして当たり、譲一は倒れこむ。

「てめー、いきなり何すんだよーちよつとでかいからって図このんなよ」

口をぬぐいながら譲一はそうこうと拳を出す。

「ダメだよ沖田君ーそんなことしたら部ができないよー」

藤崎が止める。

「わりいーな、男として逃げらんね よー！」

まるで

鞭のようにしならせたパンチを当てる。

「どーしょ? 喧嘩になっちゃたよ。せつだ携帯で畠中美ちゃんに藤崎は勢いよく走るがさつきの不良の一人につかまつた。

なんだ。これがバスケットボールか。簡単じゃねーか。

「へへえかわいいなあ。名前なんていうの？」

きもい二人組みにつかまつた麗華。

「やめてえええ放してよー」

たまらず叫ぶも周りに人影は見当たらない。

「そう暴れんなって へえへ」

その瞬間、すり鉢で擦るような音と共に蹴りが顔面に入る。一人倒しました1人と倒す

「え？ 誰？」

そして、まだ喧嘩を続ける譲二の背後から話しがける。

「おい！譲二！喧嘩はやっちゃいケネーよ？スポーツマンはー！」

譲二が振り返るとそこには津堂さんがいた。

「津堂さん！」

「こりこら、津堂さんじやない！これからは監督と呼べー！」

理解が遅かったが今度の試合の監督になつたらしい。

それから津堂さんは瞬間に相手を倒した。

「あつ！ いたいた。おーい」

駆け寄ってきたのは尚樹と誠也そして他の協力してくれた人たちだった。

「1人見つかった！ でもさーもう1人無理っぽいんだよ。で、譲二
は？」

「そりや 無理さー譲二は喧嘩してたんだからな」

津堂さんが暴露した。

「おい！ てめー俺が地獄のカリカリ音と戦っていたのにくそがー！」
尚樹が叫ぶ。そして譲二はとっさに言い訳をした。

「あ！ いや見つかったよー！ 一人！」

「あ？ 誰だよー！」

尚樹が言つて譲二が指差したのは譲二と喧嘩していた不良。

不良が断ろうとしたが津堂さんの目線に負け引き受けた。

そうして5人は一応決まり。後の不良二人も無理やり入れた。

不良達は譲一と戦つたでかいには佐藤宗孝後の二人は桜庭芳樹と小林真一そして見つかった一人が三浦辰己こうしてスタメンが決まった。

P G 沖田譲一 SG 宇野誠也 SF 桜庭、三浦、小林の誰か P F 二上尚樹 C 佐藤宗孝こうなった。

「ランニング！」

尚樹が叫んで指示を出す。

尚樹はみんなの推薦でキヤブテンになった。だがただ1人誠也だけは最後までぶちぶち言っていた。

アップを終え、実践的な練習に入ろうとしたら津堂さんが提案する。「んー。実践的も何もまったくわかんないだろ し、女バスと試合してちょっと見てみよう」

それが元に、試合をすることになった。

「よし！ SF には三浦から入れ！」

と尚樹が言つ。そして誠也が

「んでもさー俺ら三人はいいとしても、でかいのと（佐藤）ひょろひょろ（三浦）と他の雑魚二人組は（桜庭と小林）は使えねーからさーかばーしてこうぜ？」

そう、誠也が嫌味らしく言つが譲一は普通に

「ああ、当然だろ」

と答える。ピイーーーー！

「両チーム整列！ ジャンプボール！ 怪我のないようにな！」

と言つて津堂さんが審判をやる。

「よし！ 俺が飛ぶぜ！ 簡単に取つてやる」

尚樹が威勢良く言つが宗孝が払いのける。

「ふん！ どきな！ ちびが！ 俺に任せろー！」

「あ？ お前素人だろが！」

と尚樹もたまらず反論するが、

「つるさい！ただあがつたボールを沖田のところに打てばいいんだろ
？簡単じゃねーか？」

と言い返しにらみつけ、尚樹が譲った。

ピィー。ボールが上がる。

宗孝は長身に加えて、ジャンプもものすゞく一圧倒的に俺のところへボールをはじく。

そして譲二がボールを誠也に渡すが、3Pが知られていたらしくマーケがいる。

そして三浦に仕方なく渡す。

「こんなひょろい男子！あたしが簡単に！」

と威勢がいい女子の人がカットに行く。

が三浦は見かけどうりのひょろつとした感じだった。

仕方なく譲二がボールをもらいに行くが、なんと三浦は経験者でもムズカしいフックショートを打つた。

だが見事に決まった。

「なんだ。これがバスケットボールか？簡単じゃねーか」

「うん。僕にもそう思える」

三浦と宗孝が自身満満に言う。だが譲二は確信していた。

【すげえこれなら頂点いけるぜー】

運命のジャンプボール

女バスとの試合はあっさりと勝利した。

譲一のアシスト、尚樹のリバウンド、誠也の3P、辰巳のフック、宗孝の長身を生かしたディフェンス。驚くことに全員経験者だった。

宗孝は不良だつたくせに、辰巳はがり勉だつたくせに。しかし、後はそのまんま。素人だった。

「なあ、試合つて明後日なんだろ？練習たんね よ」と誠也が言つと宗孝が提案する。

「ん？ だつたら家にこいよ！ リングあるから」と言い普通のコートを予測して宗孝の家に行く。

「な、何…………？」

宗孝の家はものすしい豪邸まる^{テビ} 夫人の家。そしてコートはオールコートでしかも室内だった。

「宗孝君。君の家つてすしいね」

辰巳も驚きを隠せない。

「おう！俺の親父が医者だからよ！ おふくろもそうだから全員何で不良だつたんだよ！ と心の中で突っ込んだ。

「んじや！ 練習するか！」

と言つたのは津堂さん。いつの間に入つてきたんだ？

「よし！ 尚樹はタップ千本！ 誠也は3P一千本！ 桜庭は手伝つてやれ！ 辰巳フック千本ずつ小林は手伝つてやれ！ 宗孝と譲一は100本だ！」

と津堂さんが指示。

「なに一千本？ なんだこのメニューは」と尚樹が言つが津堂さんがにらんだ。

みんな津堂さんの強さは知つてるので文句は言わはずやりだした。

そして明後日を迎えた。

「今日の相手は？津堂さん！」
と尚樹が尋ねて返ってきたのは

「ん？青陵学園。」

そこはかなりの名門校。

「お？お前らが相手か！」

話し掛けってきたのは今日の相手らしい。

「…サツキー」

「知つてのか？宇野！」

「てめー！三上！覚えてね のかよ！俺は小佐久の4番！久原さき
だ（くばら）」「あー、いたねー！」

「てめーなめてんのか？今日ぼっほこにしてやるからな！」

「あ？何のことだ？」

「はっはー今日は俺達青陵の一年が相手だからだー！
と叫んでどこかに行つた。

「くそーなめられてんなー」

そして試合2分前。

「両校整列！」

と審判の合図に整列する。

「頑張ってねー！」

女バスが応援にきてる。

「おい！レギュラーもいるぜー！」

「よし！譲ー！レギュラー引きずり出してやロージャン！」

そして、バスケットができるかどうかの運命のジャンプボール。

レギュラー現る

ボールが上がる。

宗孝とその相手はかなり身長の差がある。

簡単に宗孝はタップをし、譲一のところへボールが行く。

「ナイス宗孝！－いくぞ尚樹！」

と譲一が勢いよくドリブルをするが相手のディフェンスに惑つた。

「ボックスワンか。」

「？おい津堂さんよ！ボックスワンってなんだ？」

「ん？ああ、小林達は素人だつたな、3Pの打てる宇野にマンツーでついて、後はゾーンを張るんだ。そうするとインサイド、つまり中でのシートが難しくなる」

「なにそれ？酷くない？てゆーかせこい！」

「いや、久原うちのチームをしつかり知つてゐからな。見事な戦術だよ」

宇野にしつこくマークがつく。

「だあーくそー！…どけえ」

「誰がどくかあー」

何かを言ひ合いしている。（馬鹿だ）

仕方なく譲一が切り込む。

（くそ！…ばすがでねえ）

その瞬間に、宇野が宗孝のスクリーンでフリーになった。

「ボールよこせえー！」

ボールが宇野に渡る。

そして、宇野が放つたシートはきれいな放物線を描きリングにノータッチではいる。

「ははははっは！…サッキ！…貴様じや俺に勝てねー！」

「サッキ！…と呼ぶな！それにお前のマークは俺じやねー！」

相手のセンター勝負に行く。が

まるで雷のよつたのように上から宗孝の手が落ちて来る。

雷のよつたな手はボールをはじき、はじかれたボールを宇野がキャッチする。

「おらよ - 譲ー！」

譲二にパスが渡るが、ディフェンスがもう来ている。

「譲ー君ー！」

三浦がパスをもらいに行く。

「よし！ いれるぞ！」

三浦が相手に背を向けながらボールもらう。

「叩き落す！」

相手の二が威勢良くジャンプするが、まるで芸術のよつたなフックでシューートを決める。

だがその後も風ヶ丘に流れが行く。

「宗孝！ パワープレーだー！」

「おおおおおしゃあああーー！」

雷の次はダンプだった。すごい力で相手を吹っ飛ばす。

「らああ

簡単にシューートを決める。

そして宗孝と尚樹のリバウンドはすゞかった。
誰も寄せ付けないリバウンドだった。

「おし！ 尚樹次はお前だ！」

譲二から尚樹のパスがこの試合初めてと行く。

「まけるかーー！」

「負けるぜ？ 久原！」

だが、一瞬で尚樹がシューートを決める。そのときから相手のベンチがゆれる。

「おい！ 久原までやられたぞ。つちのスタメンなのに。後は違つけ

ど

ビーーー！ 第1クオータ - が終わる。

「おーおーー！ 楽勝じゃねーか」

「いや、尚樹今から変わるぜ。あちらさんのレギュラーがアップをはじめた」

余裕の顔が一気にさめる。

「津堂さんどうすんだ？」

「どうすんだって全力で行くだけだろ？ 23 - 4で勝ってるんだから。でも久原だけはスタメンだからな。問題は後の連中。譲二！ 前のマークの川田峻奴かわだじゅんはPGの県選抜に選ばれている。後宗孝、お前のマークのデリック。ハーフだ、身長はお前と同じぐらいだけど、あいつも県選抜。後も名は知れてないが強敵だからな。」

だが三浦は自分のマークマンには勝てないと思っていた。
(古藤卓司ことうたくじ三浦のバスケをやってた時の知り合い)

第2クオータ-が始まつた。

ロールの、風？

青陵ボーグ

（古藤君。僕は君の事をずっとライバル視していた。でも勝てなかつた。フックシユートも何も通じなかつた。僕の天敵そして君は先輩となり卒業していった。）

あれ、居口のお前ノブタヤにてたゞたゞおの睡歩ニモニシテ
やつたのに」

三浦の顔が赤くなる

三浦！お前の「一ケソ」だ。

卷之三

小林と桜庭が驚き声をあげる。

それもそのはず、三浦しか出来ないとと思っていたフックショートを古藤がやつたからだ。

「ほほほ、風呂！」わが本場なんだよ！

「氣にすんな！」本とNINJA

「浦からバスを受け取った謙二の前にいきなり川田峻が現れる。

「ふうー、やっぱー、アホのアーハー」

だが、なかなか進めない。

「だ――――――！　へたつぴい！　パスをだせえ！」

くるしまぎれにバスを宇野に出す。

「逃げるの？」

ੴ ਸਤਿਗੁਰ

(くそ!) んなティアラーンズ。初めてだ!)

た――ぐそお！他の奴に変ねてせこんなへたりかよ！」

「宗ちゃんお願い！」

宗孝にバスが渡る。

「りやああああああああああ

またもダンプのようなあたりでぶつかる。

が壁に衝突したかのようにびくともしない。

だがひるまずターンをしてショートに行く。

宗孝が雷ならデリックは避雷針の斧のように振り落とし轟音がする。

（完璧なブロックだ。俺がやられた？）

「吉武！」

デリックの高速なバスを受け取ったのは宇野のマーク。

吉武公務彼がこの強豪のスタメンの存在理由それは、3Pだった。

「ナイツシュー・リーうーむ！」

（だめだ！流れがあっちにいつてる。俺がどうにかしないと、こいつを、川田峻を倒さないと。）

「ピィイイイファール！！」

「宗孝！ ファールはするなー！」

「すまねえ」

（はあはあ、やべえ）

（－！－！5点差？いつの間に？）

譲一があせりドリブルで突っ込む。
だが川田にカットをされる。

（3点、差）

「やつぱ、1年だけじやダメなのかな？」

桜庭がつい愚痴をこぼす。

「あきらめるな！」

そういった津堂さんも悲しみの表情を浮かべる。

（何あきらめてんだよ！校長が見てんだぜ？バスケが出来るかどうかなんだぜ？俺はあきらめねえ）

尚樹は自慢の負けん気魂を魅していった。

「譲一！ てめー川田とかいう奴にやられっぱなしじゃねーか！ 俺との1ON1のときの実力見してみろー俺は久原なんかに負けねー

（は？誰があきらめたなんていったよ、まだ3点差だぜ？待ってるよやこで！）

譲一が最後の負けん気でドリブルを開始する。

「抜かせないよ！譲一君」「

「くそお、なめんなあー···！···！」

右に抜こうとする。

そして回転しながら相手に背を向けて抜く。

（抜かれた！ロールターンか！しかしながらこのロールターンは···まるで風を起こして見る見てえーだ）

「おおしゃあー！待ってるよな？尚樹···」

「ロールの···風？」

津堂さんがつぶやいた。

まぐれだとしても

体育館のベンチ。

椅子に座ってる小林が、さつき津堂さんのつぶやきの事で質問した。

「ロールの風?なんだそりや?」

津堂さんは振り返り、まるで子供のようになフクワクした顔つきで言った。

「ロールの風って言うのはな、まあ、俺達が呼んでいた名称なんだが、俺がJBLでプレーしていた時に、同じロールターンを使う奴がいるんだ!中学生でそれを使うなんて、まぐれだとしてもすごい!」

そう言つて津堂さんに今度は桜庭が眉間にしわを寄せ質問する。

「まぐれだとしても?まぐれなのにすごいのか?てーか、ジャービーアルって何?」

「JBLだ!正確にはバスケットボール日本リーグ機構の事なんだが、今の日本のトップのバスケット選手がいるところぞ「納得した顔の二人。

コートの中では。

川田峻を抜いた譲一がドリブルで中央に走る。

「おおおおおおつっしい!譲一!来い!」

尚樹が4分の1の所で高々と手を上げボールよこせとサインを送る。中央のあたりから、譲一が胸のあたりで力をため、一気に腕を伸ばし、一直線の尚樹にボールが当たり、尚樹が取った瞬間。体育館にボールと手が当たった音が激しくなった。

「喰らえ久原あ!!」

尚樹が勢いよく突っ込む振りをして、横にボールを流す。するとマジックのように走りこんできた譲一のところにボールが行く。

あせて譲一にマークに行く久原。

その瞬間尚樹もターンをしてゴールへ走る。

だが譲二はキャッチする前にはじいて尚樹にボールが行くが、相手のデリックが叩き落そうとする。

宗孝は疲れと、デリックに負けたショックで動かない。

「チビがあ！俺の高さに勝てるか？！」

「うつせー黙つてろ！」

だがボールをキャッチに行く尚樹は確かにデリックに負けていた。

「叩き落されちゃうよお！」

観客席にいた藤崎がつい大声を出す。

（叩き落される？はっ！ばかな、こいつのあきらめないジャンプは、絶対負けない！さあ！見せろ！俺を越えて勝ったあの力を！）

「ばかな！こんなに高いなんてありえない！何m飛んでるんだ！？」

デリックも驚きを隠せなく叫ぶ。

空中で尚樹の手はデリックの手と頭を越えリングに向かい、手からボールが離れる。

デリックを越えたボールはふわっとリングに落ちていった。

「おおおおお！！入った！すげエーぞ尚樹！」

桜庭が興奮して叫ぶ。いや、会場全体がわめく。

「キヤーーーーーすごいよ！すごいー！」

女バスも叫ぶ。

「すげーー年だつてよ全員！」

「ああーまるでマイケル・ジョーダンとマジック・ジョンソンだつたぜーー！」

観客も叫ぶ。

「津堂さんーあいつらが言つてたのだれだれ？JBしつて言つヤツの選手？」

思わず身を乗り出し質問する小林。

「いや、NBAだ。ナショナルバスケットアソシエーションの略で、アメリカのリーグだ。その選手で、マジック・ジョンソンは華麗なノールックパスで観客をわかせ、マイケル・ジョーダンは神様と

言われ、そのジャンプ力は、フリースロー ラインからダンクを決め

たつて言ひ。

「へーすげえんだな。」

一一一

第2クオーター終了。

第2ヶ月—終了。

4つ目のファール

第2クオーターが終わりベンチに戻る5人。

帰ってきた5人に津堂さんが声をかける。

「よおし！ナイスプレーだ！尚樹、譲ー！」

尚樹は鼻を親指でこすりながら言つ。

「おいおい！デリックもたいした事ねーな！簡単だぜ！」

「ふん！俺のバスが良かつたんだよ」

二人が言い合つて様子を見て津堂さんが発言する。

「お前らは譲り合つて事を知らないのか？」

それを聞いてた宇野もこう言つ。

「くそおー！俺も次から活躍してやるー！」

それを聞いてた三浦がとどめの発言。

「すごいね。プロになれるんじゃない？僕も負けてられないや！」

「は？プロになれる？NBAか？プロは日本にねーぞ！」

三浦の発言に宇野が言うが、津堂さんがしつかりと言つ。

「出来たんだよ。今年からプロがね。」

みんな驚いて盛り上がつていたが、宗孝は何かを考えていた。

（どうするんだ。俺！譲一は川田に勝つた。尚樹は久原をあつさり、デリックにも勝つた。俺ははつきりしていない。三浦や、宇野は勝てそうなのに、ちきしょう！ちきしょう！）

宗孝は拳をぎゅっと握りくわしがつた。

心配した桜庭が昔のなじみで横に座り話し掛ける。

「宗さん！気にしないでバンバン行きましょうつて！」

「つるせ！大きなお世話だ！素人のお前に毎日頑張つてた俺の何がわかる！！」

宗孝は毎日不良としながらもバスケはやつていた。

ビー・ー・ー！第3クオーターが開始。

第3クオーターが開始で両チーム得点の取り合いになつた。

譲二がアシストをすれば川田もアシストをする。

久原も点に絡む。

尚樹も絡む。

三浦と古藤がフックの打ち合いでをすれば、宇野と吉武の3ヤの打ち合いでをする。

一気に65対62と点数が跳ね上がるが宗孝はなおもデリックにやられていた。

(ちきしじゅう！全員波に乗つてゐ俺だけが！俺だけが！)

「宗孝行つたぞーーー！」

川田からのバスがデリックに行く。

慌てて背後に宗孝がつく。

だがデリックが宗孝より激しいあたりをする。

宗孝押し返そうとすると、デリックはターンをしてあいつ宗孝をかわす。

(やべー畜生ー！)

フリーになつたデリックはショートの構えからショートに行く。

「うおおおおおつおおおおお

くわつと田を開き宗孝がプロックに行くが、デリックの上に覆い被さつた。

「ピィィィーファールーーー！ プッシングーーー！ 敵を押した事をあらわす用語）2スロー！」

そのとき宗孝は田を疑つた。

ファールカウントを表す札には、4と表示されていた。

(4つ目？あと1つで退場ーーー！)

「何やつてんだよ宗孝！」

譲二が叫ぶが宗孝は意氣消沈したまま俯く。

デリックはこの2スローを2本とも決め1点差になつた。

「やばいな。4つめかーとても桜庭や小林じゃなー」

津堂さんも眉間にしわを寄せた。

宗孝復活！結城昌兵来る

七
一
—
—

「タイムアウト！風ヶ丘！」

講堂さんが宗孝のフアールでアドバイスをしてやるかと思いつトイム

アーティストを取る

「おしゃべりでめぐらしく何してんだよ！」

白樺文庫

卷之三

「別れ。」

「うす」

宗孝も返事はしているが、頭には入っていなかつた。

「アホリヤー」の歴史的背景

三浦も譲一も冷静に読んではいるが、デリックの脅威はどうしよう

もなしらし

無情にも始まりのブザーは鳴る。

宗孝が毎いへうと椅子から立ち去から一一向がおひくゐる。

元氣を無し方 実在人

卷之二十一

卷之三

ズンと勢い良くはいつたとき宗香の悲鳴が聞こえる。

「ぐわやおおおおおおおおおお——! てめえ——やけんじゅね——」
振り返りながら宗孝の恐怖の鉄拳が宇野へ、ヒリッとあたる。

「見ていた女バスなどの観客から笑い声が聞こえる。

「へ？何をしたんだ？！」

「お、俺は見た！やつはカンチョーをした！……！」

そのままゲームが再開した。

始まつて譲二に尚樹からボールが渡りドリブルを開始。

「ヘイ！ジョお——！バス」

なぜかさつきからハイテンションの宇野が叫び、つい宇野にバスをしてしまつた。

バスを取るやいなや宇野は宗孝にバスをする。

「がんばれ宗ちゃん！」

その言葉にしゃくに触つたのか、宗孝は叫びテリックに挑む。

「つるせええ————!!!! 黙つとけ！」

「おおお

勢い良くテリックにあたる。

よほど威力があつたのかテリックが崩れる。
そのままショートを決めた。

「ベルリンの壁崩壊つすね！」

桜庭が叫び、それにぐつと親指をつきたて宗孝が答える。
宗孝が復活した。

ビ——！

ここで第3クオーターが終了した。

「よし！ナイスだ宗孝！3点差で第4クオーターには入れるぞ！」

「うん！俺の元気注入が効いたな！」

宇野の言葉に宗孝が背中をけつて叫ぶ。

「んなわけねーだろ！ばーか

みんなに笑いが出る。

だがこのままテリックや川田が黙らない。

「くそ！今度は負けねーぞ！」

「落ち着けデリック！3点差だ！」

「落ち着いてられるかよ！」

デリックが激しくなつている。

「落ち着けよ。」

後ろに見知らぬ人が立つ。

「昌兵！直つてたのか！」

川田が親しげに近寄る。

「久原がんばってるか？後は任せろ！」

「頼むぜ！」

彼の名前は結城昌兵ゆうき しょうへい 怪我いなかつたが、代わりに久原が出ていた。

「さあーいこうか。」

「7番？久原じゃねーぞ」

久原で十分

「おいおいーなんで久原じゃねーんだ?おまえ誰だ?」

尚樹が結城に尋ねる。

「…………久しぶりの試合だね!懐かしー。…………止めてみろよ俺を。

三上尚樹!」

「えらそーに!」

川田がボールを持つ。

しつかりと川田を譲二がマークする。

「久原は1年!2年よりは上手いけど、それでも足手まとい。けど、

昌兵は上手いぜ!」

川田そう言つとバスを結城に送る。

「こっくよー」

(いちいちうるせー やろーだな)

だが尚樹の目に入ったのは、結城がボールを持ちしゃべった瞬間フツと消えたことだけだった。

一瞬にして「ボールを奪つていた。

「遅いね!君。久原で十分なわけだ!」

カーッと赤くなり尚樹は怒りに燃える。

「おい!どうしたんだよ。おまえがあつさつと抜かれるなんて。」

「…………消えたんだよやつが。」

「あ?んなわけねーだろ…っておい!」

譲二に一言といった後すでに尚樹はコートの奥に走つていた。

「くそが!なにやつてんだ。」

譲二が怒りを震わせるが三浦が止める。

「仕方ないよ。彼は早かつた。カバーもできなかつたし、」

三浦は何か言いかけたが途中で止め、譲二にバスを渡し走り出す。

「話してるなよ!」

川田の声にはつとまる譲二。

「もうやつべきのロールターんはやられない！」

譲一はロールターんのまぐれのやつ以外川田を抜けていない。
だが斜めに宇野が立っている。

スクリーンプレーだ！（相手のコースに立ち邪魔をしぬくテクニッ
ク）

「スクリーンか！」

抜いた瞬間そのままショートに行こうとしたが、デリックなどに阻
まれる。

「つ 尚樹！」

とつさにショートからバスに切り替えた。

「ナイバス！」

（なつ久原ならもう抜けていたのに！？）

目の前には結城が立っていた。

「君とあの沖田君との連携は読んでるよ

尚樹は斜め後ろにとび、結城をかわしショートを放った。

「…フェイダウンウェイ？逃げるなよ…尚樹」

譲一はとつさに叫んだ。

シユートは惜しくも外れ、リバウンドは競つたもののデリックが押
さえ、宗孝が悔しがつている。

（なんで逃げた！俺が、かわすよりあたるのが俺だろ？…くそ！悔
しい！あいつの気迫にびびつて逃げちまつたよ！くそやうう…）

「尚樹！戻れ！ディフェンスだ！」

譲一の叫び声で我に返りディフェンスに戻る尚樹。

「いいテクニックだね、後ろに飛ぶなんて」
クスッと笑う結城。

むきになりかけた瞬間尚樹は結城のマークをはずしてしまった。

「しまった。宇野！スクリーンだ！」

ここで吉武のマークが外れた。

かかさず川田がバスを送る。

シユパツときれいな音がした。

「わりー」

（しまつた！また結城にやられた。これで4点差か。）

「くそ！今度わやられねー！」

勢い良く尚樹は叫ぶが結城は膝に手をついていた。

（昌兵！1年もやってなかつたんだ。無理するな。）

その後結城はなんも攻撃をしてこなく、4点差のまま残り1分。だがディフェンスは完璧にこなし、まったく攻められない尚樹であった。

ゴールの風再び

「おい！結城昌兵とか言つたな！なんで攻めてこねーんだ！？なめてんのか！？」

川田がボールを運ぶドリブルの音とわずかな選手の声しか聞こえなくなつたコートの中。

残り1分で、4点差で星陵学園リード。

緊張感からか、観客からの声は消えていた。

（攻めてこない？ちげーよ。攻められねーんだよおー・スタミナが持つか？後1分。やつてみるか？全力で。）

ドリブルで進む川田。

止めようとする譲一。

（どーする？昌兵を使いたい。でもあいつは、…吉武はマークがきつく3Pが打てねーし、無駄に打つ場面じゃない。だとしたら古藤か？だけどあの三浦とかゆーやつが読み始めている。いこは、デリ……）

計算している川田の隙をつき、ボールを奪い取つた譲一。

「やべえーー！」

猛スピードのドリブルでゴールにかけ進む譲一を必死に追いかける川田。

（無理か？追いつくのは…！）

だが川田が追いついた。

シユートに行く譲二。

それを止めようとしてジャンプをする川田。

その瞬間尚樹と結城が叫ぶ。

「いけえ———譲一！————！」

「誘いだ！乗るな————！」

（シユートブロックだ！打て！）

川田がブロックに行くが打たない譲一。

(まだ打たないのか?)

(川田、体が流れて止められねーだろ?)

ショートを放つ譲一。

そして川田は譲一に乗りかかった。

ショートは決まる。

「ピィイイー————ファールプッシュングー！カウントワ
ンスロー！！」

がっくりと膝に手をつく川田。

女バスのほうかも歓声が上がる。

そしてフリースローを決めその差1点に詰まる。

だがこのショートで湧き上がる5人の譲一、尚樹、誠也、辰巳、宗孝はディフェンスそして、コートの3Pの位置で待機する吉武公務の存在に気がつかなかつた。

ボールをすぐデリックが持ち、思いつきり投げる。

「吉武えええええー！！！！！」

はじけるような轟音がしたすぐには、吉武がショートを構えている。しまつた!と、全員が思い汗がわっとふきだした。

そしてノーマークの吉武は綺麗で華麗で纖細な3Pショートを放つて、そのボールは綺麗な放物線を描いていた。残り43秒のときだつた。

そのショートで5人は鳥肌が立ち、涌き出た汗が一瞬にして引いていた。

「4点差になつちまつた。いや、戻されちまつた。」

「いや、あきらめんのは速い!いくぞ!」

宇野ががっくりとするがすぐに譲一が盛り上げる。辰巳がボールを出す。

譲一が攻めこむ。

「誠也!」

「宗ちゃん!」

「尚樹!」

「辰巳！」

パパッパパッといままでにない、ボール回しだった。

「くそ！冷静じゃねーか！」

そして最後に譲二がドリブルでカットインする。

（攻めるには出きるかわからんねーけど、ロールターンしかねエー！）

にわかのロールターンを仕掛ける譲二。

そして奇跡が起き、譲二是風を起こせた。

ロールターンの風が包み込み、ジャンプして風を抜けたら、そこに

は。

空にリングとボールを持っている俺しかいなかつた。

決着――

「おおおおっし――ナイツシュー譲――」

静かな体育館に歓声が出始めた。

譲一が起こした風は誰にも止められることなくリングに吸い込まれていた。

くやしながらも攻め出す星陵。

そして時間が無いのでオールコードでティフェンスをする風ヶ丘の5人。

川田がドリブルで抜こうとするのを防ごうとする譲一。

(さっき俺は追いついた!スピードでは上!抜ききつてやる!)

だが川田は一瞬で廻りこまれた。

そしていきなり前に廻りこまれ、スピードでは上と思っていたので

驚き一瞬とまどった隙を突きカットした。

そのままゴールに向かう譲一。

「悪い! デリック! 昌兵! 止めてくれ!」

ゴールに向かいジャンプをする譲一。

その前に立ちはだかるデリックと昌兵。

だが譲一はボールを後ろに投げた。

残り6秒2点差星陵リード。

「逆転には3P!」

譲一が言った後、後ろにボール投げ、取る誠也。

「やっぱ最後は俺でしょう?」

と言いシューートを放つた誠也。

1番いい弧のシューート。

「もう、外すのは」「めんだ!あのときみたいに――」

シューパッと、聞こえた音。

その後。

「ビィイイイ――イイ――――!――!――!――!

試合終了を告げる音が会場全体に鳴り響く。

「勝った。勝ったんだな！ やつぱ最後は俺！」

ワアアアアと歓声が起きる。

（完敗だな。沖田譲一。次は好きにさせない。）

「このとりで風ヶ丘！ 礼！」

「ありがとうございました！」

ベンチに戻る5人に拍手を送る津堂と女バス。

「よつしゃあーやつたぜえー勝つたあーー！」

叫ぶ誠也。

「よくやつたな、おまえらー！」

盛り上がるベンチに近づく川田。

「おい沖田譲一！ 最後なんでお前はあんなに速く走れたんだ？ 速攻の時は遅かった。」

「あの速攻をあーわざと追いつかしてファウルもうつたんだよね。」

「な！」

ちつと舌打ちをして去つていった川田。

「イヤーいい練習試合だつたね！」

お気楽に言う誠也。

「良かつたなこれで部にしてもらえんぞ！」

津堂が言つ。

「そう言えばそういう練習試合だつたんだな、宗孝の発言にみんながあきれる。」

そして後ろには校長が立つていた。

その校長を見た尚樹が近づいていく。

「校長！ 見てたか！ 勝つたぜエー1点差だけど。」

そう言つ尚樹にいやな顔をするかと思つた校長は真逆に笑顔で言った。

「ああ！ 見ていましたとも！ あの強豪を倒すなんてね。驚きましたよー正式に部を作る事を約束すると同時に部費も出しましょー！」

少しきょとんとする皆の中1人冷静に譲一が尋ねた。

「なあ、なんで部を作らなかつたんだ?しかもバスケ部だけ。」

「そつ・言・う・譲・」に津堂が

「そうですよね。確かにバスケ部は弱かつたけど、暴力事件を起こしたわけでもないのに。」

「じゃあ。あなた達の先輩がやつたことで、とんでもなくPTA会長やその他の方々が激怒してしまい、部をなくすまでおいやられてしまつたわけを話しましょうか?」

そう言う校長に全員うんとうなずく。

「じつはですね。あれは、ちょうど8年前の時でしたね。」

津堂さんも現役でここにはいなかつた時だ。

「当時の先輩はとても強かつたですよ……」

「ナイツシュー――――――!――!

7番のユニフォームを着た人と、4番のユニフォームを着た人のナイスプレーに興奮し喚き叫ぶ監督兼顧問の校長。

「校長が顧問だつたんだ」

「ええ。そして大会が始まりました。順調に勝ち進んだあの人たちはどうとう全国行きの切符をかける試合に臨みました。」

（ん?遅いなあーヤツら）

「最初は少し遅いな。としか思つてなかつたんですが、結局来ませんでした。」

「なんで?」

宇野が聞くが校長も知らなかつたらしい。

「ええ、その後学校で何度も聞いても答えてくれず、何しろ全国行きがかかつっていたので結局部を停止するしかありませんでした。」

背後から声がした。

「そのことなら、俺が話してみまよつ。」

後ろに立つていたのは180cmはある人だった。

「……陵駕？」

りょうが。とつぶやく津堂。

「陵駕。お前なんでこんなとこねー?」

津堂が聞くと陵駕は、

「そりゃあこの中学生が母校だからですよ！」

かねての校説

「陵駕？まさか！あの津浪陵駕か！？」

へ立たれ立つかあんたの俺はここのお長は用があるて

セイウチ

「おおおおおおーー先生ーー久しぶりいーー」

「え?」Bの陵駕さん?風ヶ丘出身だったんですね!」

そう叫ぶ辰巳。そして校長が、

「尚樹君！この人が当時のキャプテンで君の着ている4番を着た人

!同じボシシミンだしね。」

「そ二なんた

「…………」小声だったのと誰が言つたのかわからなかつたが多分尚樹だろう。

藤奇が「一闇一矢」を考案した。

「それは當時譲り畠と同じア番を着ていた

「俺の事かい？」

背後から声がしたそこには身長が170ぐらいの人があった。

「ジニア」

陵駕が叫んだ。

ヒゲーと反応した譲一。

「おやが 議治までいるなんて

偶然たぬえに俺と同じ名前のサトが同じアパートのエーフェルを着

その男はすたすたと譲一にちかづくと、テロップをした。

「ま、俺の苗字は瀬良せらだし、漢字も違つけどね。それに…俺の実力には程遠い！」

讓一が力チンとして言い返さうとしたがその時には校長に話しかけた。

「おっす。博林（くればやし。校長の苗字）ー元氣？」

校長にも気軽だった。

「おい！讓治！誰のせいだと思つてんだあの事件は…」

そう言う陵駕。

「はいはいーどうせ全部俺のせいですよ！俺の勝手な意地のー」「どうこうことです？」

「あ、すみません校長！あの時は讓治の意地で言わなかつたんですが、…今ならいいよな？讓治」

「ああ、」

「あの時は讓治が勝負のために抜け出したんですね。」

「なんだ考えていることはいつしょか？」

陵駕の話はまた中断した。

すると後ろには3人の人が。

「おお、お前達まで。」

その3人は160程度の低身長の人と2mはあるビッグマンそしてすらりとした眼鏡をかけているのが讓治と同じ位の人だった。

160程度のは当時SGの3Pショーターの木場氏懸河今は社会人でバスケを続けている。

2mは当時のパワープレイヤー瓦屋美代治かわらやみよじこの人も社会人に進んだ。

眼鏡をかけているのが当時SFのフックショート使いの大神純おおがみじゅん今は学者。

讓治はJBLらしい。

「じゃあ話そつか歴史をー」

反発、敗戦、自信、結果

「俺達はなあ、ミニバスからずっと一緒に、ミニバスでは全国に行つたんだよおーでもなあー中学でナあー」

瓦屋先輩が間延びした言い方で言ひ。

「うおおおーーまた決めたあーあの7番ー上手いなあー」
中学の初めての大会。

監督の博林は実力順でレギュラーを決めるために、5人はすぐにスタメンになつてしまつた。
その当時の先輩は下手ではあつたがそれなりにやつていたためいつき、そして反発した。

ガン！と譲治のむなぐらを掴みロッカーにたたきつける。
「てめーらがでかい顔をしてくれたおかげでめぢやめぢやだぜ！でけよ邪魔なんだよ！」

「ハン！負け惜しみか？見苦しいぜ？下手くその方が出ていった方がいいんじやないの？邪魔だし、端っこにでもいてくれよ。あんた俺が来る前は俺のポジションだつたらしいね。実力重視！この言葉が博林の考え方だ！解る？」

「何い！」

先輩に反発する譲治をなだめようと陵駕が出てくる。

「すみません！おい！譲治も生意気なこと言つてねーで謝れよー！」

「ほおおー。言こと言つじやねーか陵駕君ーなあー」

謝る陵駕に先輩がいきなり頭をつかみ膝蹴りをした。

「くあーーぐづ！」

悲鳴を上げる陵駕。

「あーあ。やッちゃッタ！陵駕は俺より短氣で危険なんでぜえー？

その前の俺が殴るけどね！」

一步前に出る讓治を片手で制し止める。

「やめろ讓治！」「

「あ？ なんでだよ！」

「俺がやるからだ！」「

そういうとすさまじいスピードの鋭いパンチが先輩に入る。

「なにすんだよ！ やつちまおうぜ！」「

「相手になりますぜ先輩！」「

そういうと5人の先輩たちは突っ込んだ。

「このでかぶつがあー！！！」

などと罵声が起きるが、何しろその時すでに180はある長身瓦屋と、合気道を習う木場氏懸河と大神。

そして危ないと言われるコンビの瀬良と津浪には相手ではなかつた。10分後には全員横たわっていた。

その結果、10日間の活動停止、そして先輩は居づらくなり全員退部。

5人の先輩しか入らなかつたので1年5人の部活になつた。

そして県大会まで勝ち進むと言つ快進撃を見せたが、結果はそこでストップ。

小学で全国に行つてもそこまでは通用しなかつた。
そして先輩たちは小学校から反省会をしている場所のコートに立ち寄つた。

「くそ！ なんで勝てなかつた？ ちくしょう！」

空気が暗くなる中一人叫ぶ讓治。

「やっぱ。なめてたんかな？ バスケを」
そう言つ瓦屋。

そして無言になる。

「いひなつたらよー頂点極めよつぜーやつじやなきや、 そうじやな
きやよー！ 気がすまねーんだよ」

こうして5人は、一つ一つのプレーに誰にも負けない自信と強さを身に付けていった。
そして2年の時全国に行つた。

決闘！

瀬良達のミニバスからの5人は中学で全国に行つた。が、試練は3年の時だった。

全国に行きとても注目を浴びる瀬良達。

世間では『2年で既に全国に行つてゐるんだ。今年も楽勝だろ？』と言われ期待が積もつていた。

だが全国を阻む1つの中学が前に立つた。

それは、青陵。

そう、川田達の先輩で、伝統的な強いチームの黄金時代に入つたはじめの年。

今までで一番強い時の青陵だった。

全国に行けるのは1チームのみ、トーナメント式で行われ、ブロックは別々。

お互い順々に勝ち進み決勝で当たることになった。

3年になつた先輩の5人を中心に団結力のあるチームになつた風が丘は、突然内乱のようなものが起きた。

そのきっかけは、譲治から。

「やめる！？ 中学をか！？」

「ちがう。転校だ」

「同じようなもんだろが！？ 譲治！？」

体育館で喚き散す津浪に冷たくことえる瀬良。

「なんでだよお！？ 決勝戦にきたんだぜ！？ PGのお前がいなくちや勝負なんねーだローが！お前のプレースタイルから中心のチームだつたろ？ 忘れたか？」

「大丈夫さ、俺がいなくても2年のカズがいる。」「じゃあなんで転校なんだ！」

黙り込む瀬良。

その譲治を全員がにらみつける。

「『』の学校じゃよ一焰咲にいけねーんだ。全国トップの高校の監督
に誘われたんだ。でも『』じや行けないから、『』たちの中学生に来い
つて。」

「…何言ってんだよ！俺ら高校も同じで、行って頂点を目指すんだ

津浪は絶えられなくなり瀬戸を殴った。

今度は漱良が津浪の顔面に強烈な一撃を送る。これが最初で最後の”コンビ”のケンカであつ

「勝負だ！ 一〇二一で、明日いつものコートで待ってる。俺が勝つたら転校する！ お前が、いや。お前ら４人誰か一人でも勝てたら、俺は決勝戦へとそのまま行く！！」

「のるせその勝負！」

そして翌日。

瀬良はコートの真中でボールを持ち仁王立ちしていた。
そこに4人がやってきた。

「行くぞ瀬良！どうしても来てもらう。」

瓦屋が尋ねる。

瀬良が帰った後4人は話し合っていた。「どうするつて、やるしかねえだろ?」

「今度は木塚田 すると大補か
でも戦略とかはどうするんだ?」

「いや、 、 、 、 真っ向勝負だ！」

津浪は力強く言った。

「いいか、 順番は懸河、 美代治、 純。 そして俺だ。 なるべく粘つてくれ疲れたところを俺が倒す！ 悔しいが奴に1ON1で勝てるのはそれだけだ！」

（奴？ 陵駕が讓治の事を讓治と言わなかつた。 それだけまじなのか。）

「いいだろう、 この4人で1番1ON1が強いのはお前だからな。」

そういう懸河。

「よし俺から行くぜー！」

勢いよく懸河がでる。

「いくぞ。 先攻はもう1つからなー！」

「ああ。」

そして5人の決闘が始まった。

本当の強さ

「なあ 喧嘩した勢いかもしれないけど、讓治はなんでこんな無謀な勝負を仕掛けってきたんだ？」

懸河対讓治の10N1が始まつた朝、途中で美代治が言い出す。
「確かに、あいつの10N1はずば抜けて上手いけど、俺達4人に連続で勝てると思わないだろ？それに、あいつはウチのエースPG。冷静さがかけることはないし、しつかりした状況判断ができる。喧嘩の勢いの勝負とは思えない。」

冷静に言い出す津浪にまた大神が

「は？なら俺達に絶対勝てる自信があるってのか？」

そう言う大神。

「ああ、絶対勝てる自信があるそудаよ

津浪がそう言うと懸河の勝負がついた。

「10・0で懸河の負け……」

「はあ！…はあ！…お、俺が3Pを打たしてもらえなかつた…！…ありえねエ！」

ものすごい強さだった。

そして美代治も10・3、ゴール下でのシュートを打たしてもらえず長身を生かせず、無理に打つた3Pシュートが偶然入つただけであつた。

大神はフックシュートを完全に止められ手足も出ず10・0だつた。

「いくらなんでもこれほどまで実力差があつたなんて」

4人は全員そう思った。

最後の一人、津浪陵駕さえも瀬良讓治に勝てるか自信が無くなつていた。

だが全ての希望は最後の津浪に託された。

「最後だな、陵駕。来い！」

津浪の頭の中では、記憶と思考色々な物が飛び交つっていた。

（いつからだ？これほど実力差がついたのは。俺達はミニバスからずっと一緒に同じ期間をやっていた。じゃあ何故こんなにもあいつが強く大きく見えるんだ？くそ！弱気になるな！大丈夫だ勝てる！やれ！動け！すくんでいるのか？もう負けだと思っているのか？違う！認めるな！目の前の現実を！うそだ！うそだ！）

「どうした？こないのか？もう6・0だぜ？」

瀬良の言葉にはつとする津浪。

もう既に6点取られていた。

「なぜ、何故お前はこんなに強い？いつからだ？実力を隠し俺達に付き合っていたのは！」

「…………陵駕、どうぞ」とだ？わけがわからねえよ！

津浪の言葉に叫ぶ木場氏、大神も瓦屋も同じ気持ちだった。

「悪い、、、最初からだ！」

その瀬良の言葉に全員がガクつとした。

そしてその後も続けるが結局10・0。

瀬良は焰咲に行くため転校をその日にして。

そして残りの4人は試合には向かわず瀬良との最後の別れをした。

「そんなことがあつたんだな。」

暗くなる校長に瀬良が

「わりいな！でもそのあと俺は高校で全国優勝の最優秀選手なつた
しいいジャン！そのあとすぐに、高校でのJBLだぜ？すげえだろ
！ま、陵駕！話の続きをあとでいいだろ？やりてー事があんだけ！」

「ん？まあいいが、やりたい事つて？」

「おい！沖田君！」「一トに入りな！」

「こつと言つた瀬良だがすぐに真顔になり言つた。

「俺が本物のロール風魅してやるぜ！あんなのでロールの風つてい

わねえからな！あれは、俺の高校で編み出した最強のドリブルだか
ら！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1006a/>

アシスト

2010年11月25日02時51分発行